

2. 研修旅行報告書

伊那市在住 唐木 一夫

はじめに

平成 18 年 3 月 31 日付で新伊那市に合併した旧高遠町・長谷村は、過疎地域として、主だった企業の進出も見られず、今尚衰退傾向を強いられている。合併を機会に旧 3 市町村の枠組みの払拭によって、公益的な地域おこしが可能になる。旧 3 市町村が各々持っていた観光資源を、限られた予算の範囲でソフト面やマネジメント面に力を入れて、効果的な集客を試みたい。そんな考えもあって、今回の研修旅行は「百聞は一見に如かず」、地域の歴史・文化に接することが出来、得難い機会であった。

建石繁明先生との出会い

私は建石先生が前信州大学農学部の教授¹で、現松本大学教授に就任されたことは承知していた。研修旅行の前日、松本大学の腰原さんから電話で、「明日朝は中央自動車道の小黒川PAで大学のバスに乗車してください。その時松本大学の建石先生も乗車します。」との連絡をいただいた。先生とは初対面でしたが、二日間蘊蓄を傾けられたお話を分かり易く伺うことができ、有意義な時間を過ごすことが出来ました。研修旅行後、建石先生とは国土交通省が進めている三峰川総合開発事業のモニター会議、又新伊那市（伊那市・高遠町・長谷村が合併）の誕生に伴う伊那地域協議会の会員メンバーとしてお付き合いを頂いている。

水土里^{みどり}ネット^{たちばい}立梅用水

今の農村の実態を調べてみると、日本の総世帯数 47 百万のうち、専業農家は 40 万世帯に止まり、農地の約一割に相当する 44 万²が遊休地である。尚且つ後継者のいる専業農家は半分ほどなので、先行き荒廃した農地が増えていくのは確実である。今回見学した旧勢和村地域では、荒れた農地の拡大と景観悪化に不安を抱えた住民や農業団体が、協働して新たな地域づくりを展開している。次に若干感想を記してみたい。

村内には江戸時代、西村彦左衛門が造った立梅用水がある。用水路が完成した 180 年前を思い起こしてみたい。畑や山林だった地域に用水が流れ始め、稲穂の垂れた水田が一望に広がる。農民は用水路の完成で感極まっただろうと否応無しに想像できる。

今から 18 年前、住民の間で「土地改良事業によって立梅用水の景観が失われる」と危惧する声が挙がった。危機打開のために住民側から盛り上がった勢いは凄い。我が村にある「地域資源」は何があるかをあぶり出した。次から次へと新しい発想が出てくるから不思議である。（ワークショップ・KJ法等で討議したと考えられる）

具体的に取り組んだ一部だけでも次の通りである。

★ 「あじさい一万本運動」

¹ 2003(平成 15)年 4 月 8 日の信濃毎日新聞で、ますみヶ丘平地林についての特集が組まれている。1987 (昭和 62) 年、市内の企業によるゴルフ場建設が浮上した。バブル崩壊と住民反対で中止になった。私は、当時建石先生が平地林の保護を強く訴えておられたことを鮮明に覚えている。その功あって平地林は今以て貴重な緑の奥座敷となっている。

伊勢「おかげ横丁」に出品したあじさい展示

- ★ 「農村のビオトープ」(メダカ池)
- ★ 劇団「ほてい葵」の誕生

「あじさい一万本運動」の発端は、地元自治会長が土地改良区に、アジサイの植え付けを提案したことである。住民と一緒に提案に賛同した。苗木の植え付け・下草刈りをボランティアが進んでやる住民パワーには驚かされる。住民に理解され目標の一万本達成する迄には、リーダーの強い信念と実行力が必要である。残念ながらあじさいのシーズンは終わり、今回の研修で花爛漫の眺望は出来なかった。

ビオトープにはメダカがホテイアオイの間を縫うように泳いでいる。閑静で自然を取り戻した「めだか池」は、今日住民の憩いの場所となっている。一昨年から、育てたあじさいを伊勢の「おかげ横丁」で展示しているという。それも「おかげ横丁」の強い要請によって実現したものである。現代はマーケティングの時代である。あじさいを立梅用水から全国に情報発信したらどうか。行く末「地域ブランド」の構築も視野に入れ組みみたい。

劇団「ほてい葵」について説明を受けた。西村彦左衛門を後世に語り継ぐため、地場の演劇は貴重である。寸劇の合間に観客は、「彦左衛門のつくった立梅用水の美味い米」のお握りを食べるという。まさに配役と観客が一体になって一時を過ごすのである。我々は世知辛い今こそ、地域文化を大切に保存する手立てが要求されている。

農業法人せいわの里「まめや」

バスは正午近くせいわの里「まめや」に着いた。「まめや」の店舗は外から見た限り、際立った変哲は感じない。雨混じりの天候だったが、店内は来客で賑わっている。商品ケースは四段に仕切られ、勢和大豆・らっきょう・たくあん・豆乳プリン・しそジュースなど地元産の加工食品が並べられている。店内の奥を見渡すと昼食の食材が待ち構えている。「まめや」の手作り料理は旬の食材をふんだんに用いているようだ。料理の盛り付けをするのにお重を使っているから、田舎育ちの我々にとって尚更親しみ易い。店内は明るく清

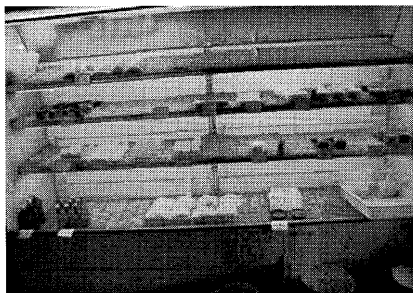


写真1 「まめや」の手作り食品

私たちのこだわり
 愛情を込めて住込
 んだ味噌一生懸命
 作っている豆腐
 これらに使用して
 いるは勢和でとれ
 た福豊です
 漬物と料理に使用
 する材料も、できる
 かぎり地元勢和の
 食材にこだわりま
 す。

図1 資料 「まめやの農村料理」より

潔感を感じさせる店作り。近くにいた中年の女性に聞いてみた。「ここへは(まめや)ちょいちょいきますよ。カロリーも低く地元で採れたものを食材としていただけるのはいいですね。毎日大勢のお客さんで一杯ですよ」という。私も手前の「しいたけ」から順に取っていった。昔懐かしい御袋が作ってくれた田舎料理である。胃袋に相談もせず皿に山盛り

一杯。今流行のバイキング料理である。(写真2)



写真2 「まめや」の誇る農村料理

私はお墨付きの糖尿病を背負っている。先日栄養士の食事指導を受けたばかり。「バランスの取れたメニューを。出来たら幕の内弁当がいいですね」としっかり言われた。近年日本人の食事は洋風化が進み肉類の消費が増えていると聞く。若者の間で一日の食事をコンビニで買って済ませてしまう人も多いようである。アンバランスな食事が原因かは定かでないが、成人病が急激に増えているようである。その

点では、「まめや」の食事は糖尿病保持者にとって最適なメニューである。その上一人1,000円と手頃な価格で有り難い。ここで使う食材は全て地元の農家が栽培し地元へ供給する体制を確立している。農地の有効利用と農業の新しい方向性を示唆している。「まめや」のオープンによって、安心安全な食材の提供と新たな雇用の場が実現できた。農業法人せいわの里で働く従業員は35名、年齢も30才から80才台に亘る幅広い年齢層で支えられている。80才台のおばあちゃんは自給自足の時代を経ただけに、ものづくりは一級の腕前だ。この知恵袋を次の世代に伝えていくために、農業法人せいわの里を設立した主旨の一つという。

水土里ネット立梅用水のキーパーソン

立梅用水の取り組みをキーパーソン事務局長の高橋さんから詳細な説明をお聞きすることができた。

ふつう新しい事業を企画して軌道に乗るまでに苦難の連続で、失敗の事例のほうが多いと思う。「あじさい一万本運動」の発端は、失われていく立梅用水に対して住民が、その保護に立ち上がった。実施するに当たり住民の中に反対する人も出ていた。その時事務局長高橋さんの説得力、人柄が大きく影響する。その意味では、住民から慕われ挫折すること無く、説明責任を果たしやり遂げた高橋さんの功績は絶大である。

「液晶のシャープ」の企業進出で活力溢れる多気町

三重県多気町にはシャープの三重第3工場がある。一瞬バスの車中から工場の社屋を見ることができた。今回は視察の対象に入っていないが、シャープの三重県内進出で、地域経済に大きく寄与していることを知っていたため目に留まった。(写真3)²

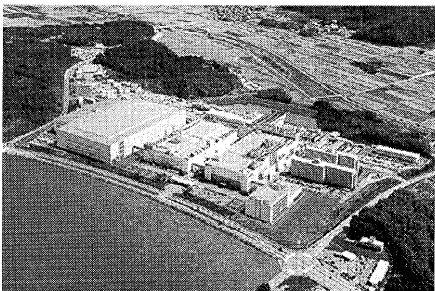


写真3 シャープ三重第3工場

液晶テレビ向けを除いた液晶パネル生産は、多気工場が国内主力工場である。平成14年2月、IT不況下の時期に三重県はシャープに135億円(三重県90億円、亀山市45億円)の補助金を出し亀山工場の企業誘致を図った。当時の北川正恭知事のトップセールスが話題になった。平成16年4月1日現在、旧多気町に

²<http://www.itmedia.co.jp/news/> HP

はシャープの従業員 443 人が居住している。(住民基本台帳より) —— 新たな雇用拡大で当地に大きく貢献 ——

10月26日付の日本経済新聞紙上で、9月の中間決算が発表になった。シャープは経常利益が813億円と前年同期比25%増加した。液晶で活況に沸くシャープの素顔(社屋)を、車中から垣間見ることが出来て幸運だった。

あとがき

松本大学が主催しました二日間の研修旅行で、高橋事務局長をオピニオンリーダーに地域住民が一带となって新企画に取り組む心意気には感嘆した。過疎に悩む旧長谷村、高遠町の地域起こしを模索する中で、耕作放棄地の有効活用を視野に研究してみたいと思うようになった。

10月31日付の信濃毎日新聞で、長谷中学校は、「学校給食甲子園の決勝大会に出場する」と報じていた。民間法人が、学校給食に地元産の食材を積極的に利用し、郷土料理の伝承や食育を進める目的で企画したようである。是非この機会をステップに、長谷の地に合った多面的なアイデアを考えてみたいと思う。

その他地域の文化歴史を探索する上で、伊勢神宮では一同参拝することができ、由緒ある施設も多々見学することが出来た。また中野学長、玉井先生、建石先生とは寝食共にさせていただき、その間多岐にわたり示唆に富んだお話を伺う機会を持つことが出来た。松本大学が建学の精神として「地域を活かす、ひとづくり大学」を謳っている。白戸先生からも貴重なコメントをいただいた。事務局の皆様の細部に渡るご手配を頂き感謝している。私共一般社会人にも大学を解放していただき、今回中野学長自ら現地に出向かれた。それだけに松本大学が地域経営に注力されておられる所以と強く感じた次第である。

最後に松本大学の益々のご発展をご祈念申し上げ、御礼としたい。有難うございました。